

1サムエル25-27章 「困難な中の忍耐」

アウトライン

1A 過ちに気づくダビデ 25

1B 裏切られた善行 1-13

2B 機転を利かせた女 14-22

3B 王になってからのつまずき 23-35

4B 主の復讐 36-44

2A 大きく勝利するダビデ 26

1B 余裕の救い 1-12

2B 悩みの明かし 13-20

3B サウルの愚かさ 21-25

3A 疲れてしまったダビデ 27

1B 敵の中での居住 1-7

2B 偽りの上塗り 8-12

3B 兄弟の敵 28:1-2

本文

サムエル記第一 25 章からです。私たちは、サウルがダビデを追っていたけれども、かえってサウルがダビデの手に陥りそうになった話をこの前読みました。エン・ゲディにおいて、ダビデがいた洞穴にサウルが入って来たのです。ダビデがサウルに示した姿はまさに、キリストを指し示していました。サウルが悪を行なっているのに、ダビデはそれを善で返しました。このことによって、サウル自身が、「あなたが必ず王になり、あなたの手によってイスラエル王国が確立する(24:20)」と言いました。

私たちが今日読む 25 章から 27 章は、そのようなダビデであっても、悪に対して善で報いるという姿勢がいかに大変であったかを物語る、教訓の話になっています。ここから、いかに人が神に頼らなければいけないかを知ります。自分たちには、そのような柔和さが備わっていないことを知ることができると思います。

1A 過ちに気づくダビデ 25

1B 裏切られた善行 1-13

25:1 サムエルが死んだとき、イスラエル人はみな集まって、彼のためにいたみ悲しみ、ラマにある彼の屋敷に葬った。ダビデはそこを立ってパランの荒野に下って行った。

ここで、イスラエルの歴史にとって大きな幕切れが来ました。ヨシュアが約束の地に入って来て以来、霊的に停滞していたイスラエルを神に立ち返らせた預言者サムエルが死んだのです。この書物名は「サムエル記」となっていますが、もちろんこの後の話はサムエルではなく、その後に残された人が彼に代わって書き記したものであります。サムエルが育ち、また生涯拠点としていたのがラマですが、そこで彼の葬儀が行なわれました。

ダビデは、エン・ゲディの要害から南下してパランの荒野へ下って行っています。サムエルの死がこの移動と何の関連があるのか分かりませんが、はっきりしているのはダビデの心に、サムエルの死によって何らかの変化があったことが言えます。イスラエルの歴史の中で、大きな霊的变化が起こる時は、偉大な指導者が死んでから起こっていました。ヨセフが死んでから、エジプトは親イスラエルから反イスラエルへと変わりました。ヨシュアが死んでからイスラエルが、カナン人の他の神々に仕えるようになりました。ダビデにとってサムエルは、霊的な助言を受けていた、慕い求めるべき恩師のような存在です。

彼がいなくなったということは、彼の霊的生涯に大きな影響を与えたことは否めないでしょう。そして彼は長いこと、サウルがダビデを追っているために主にいけにえを捧げることができずにいました。それで彼は、こう歌ったのです。「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましようか。(詩篇 42:1-2)」彼の心は渴いていました。

25:2 マオンにひとりの人がいた。彼はカルメルで事業をしており、非常に裕福であった。彼は羊三千頭、やぎ一千頭を持っていた。そのころ、彼はカルメルで羊の毛の刈り取りの祝いをしていた。
25:3 この人の名はナバルといい、彼の妻の名はアビガイルといった。この女は聡明で美人であったが、夫は頑迷で行状が悪かった。彼はカレブ人であった。

ダビデのいたパランの荒野の北にカルメルがあります。北イスラエルのカルメル山のカルメルのことではありません。そしてここに極めて特徴的な人物が現れます。「ナバル」という愚か者という意味の男と、それとは対照的な美しく聡明なアビガイルという妻がいました。「ナバル」という名を親が名づけたのか、それとも後の人たちが彼のそういうあだ名をつけたのか意見が分かれています。そうですが、聖書に出てくる人物はその生き方がその人の名に反映されています。そして「カレブ人」であるとありますが、これが固有名詞ではなく形容詞だとすると、「がみがみいう犬」という意味だそうです。

そして彼は非常に裕福です。サウルはイスラエルの王ですから裕福であったでしょうが、ナバルも今で言えば経済界の王のような存在であったのでしょう。そこに無理やりアビガイルが妻として連れて来られたのではないかと思われれます。

25:4 ダビデはナバルがその羊の毛を刈っていることを荒野で聞いた。25:5 それで、ダビデは十人の若者を遣わし、その若者たちに言った。「カルメルへ上って行って、ナバルのところに行き、私の名で彼に安否を尋ね、25:6 こうあいさつしなさい。『あなたに平安がありますように。あなたの家に平安がありますように。また、あなたのすべてのものに平安がありますように。25:7 私は今、羊の毛を刈る者たちが、あなたのところにいるのを聞きました。あなたの羊飼いたちは、私たちといっしょにいましたが、私たちは彼らに恥ずかしい思いをさせたことはありませんでした。彼らがカルメルにいる間中、何もなくなりませんでした。25:8 あなたの若者に尋ねてみてください。きっと、そう言うでしょう。ですから、この若者たちに親切にしてやってください。私たちは祝いの日に来たのですから。どうか、このしもべたちと、あなたの子ダビデに、何かあなたの手もとにある物を与えてください。』」

「羊の毛を刈る」のは、一つのお祝いです。その時に、主人が気前よく人々に分け与えるのは慣習になっていました。そしてダビデが若者を遣わして頼んでいることは、今で言うならばお給料をもらうようなものです。羊飼いは常に盗人などの危険に晒されていますから、勇士たちが彼らを守ったのは一つの立派な仕事をしたのと同じです。アメリカであれば、チップといったところでしょう。私たち日本人は慣れていませんが、これを受け取るのが前提で元々受け取る給与が低く設定されていますから、客がチップを支払わなければ大変なことになります。

そしてダビデは、逃げている身ですから人々の善意によらなければ食べ物を得ることはできないこともあります。祭司アヒメレクがダビデのひもじいを見て、聖なるパンでありましたが彼に与えました。アヒメレクはダビデの本当の窮状を知らなかったにも関わらず与えたのですから、ナバルはなおさらのこと与える義務がありました。

25:9 ダビデの若者たちは行って、言われたとおりのことをダビデの名によってナバルに告げ、答えを待った。25:10 ナバルはダビデの家来たちに答えて言った。「ダビデとは、いったい何者だ。エッサイの子とは、いったい何者だ。このごろは、主人のところを脱走する奴隷が多くなっている。25:11 私のパンと私の水、それに羊の毛の刈り取りの祝いのためにほふったこの肉を取って、どこから来たかもわからない者どもに、くれてやらなければならないのか。」

この「何者だ」という言葉には、極めて横柄な、慥然とした態度を見ることができます。かつてモーセに対してパロが、「主とは何者だ」と言ったのと同じです。ダビデのことを知らなかったからそう言ったわけではありません。「エッサイの子とは」というのは、サウルが侮蔑してダビデを呼んでいる時に使った言葉です(1サムエル 22:7)。ナバルはダビデと同じユダ族の者であるにも関わらずそう呼んだのですから、腸が煮え返るような言葉です。そして、「主人のところを脱走する奴隷が多くなっている。」と言っているのは、ダビデが主人サウルから脱走した奴隷だと言っているのです。

そして、「私の」と繰り返して言っていることに注目してください。「私」と「私の」という言葉が八回

出てくるそうです。弱った人、貧しい人に分け与えるという心が一つもない自己中心な男です。

25:12 それでダビデの若者たちは、もと来た道を引き返し、戻って来て、これら一部始終をダビデに報告した。25:13 ダビデが部下に「めいめい自分の剣を身につけよ。」と命じたので、みな剣を身につけた。ダビデも剣を身につけた。四百人ほどの者がダビデについて上って行き、二百人は荷物のところにとどまった。

ダビデの取っている行動は、至極当たり前のことです。良いことに対して悪で報われたのですから、それ相応の報復があった当然です。しかし、それは人間的に言えばその通りです。それを行なわなかったのが 24 章に出てきたダビデであります。サウルの言葉を借りれば、こうなります。「あなたが私に良いことをしていたことを、きょう、あなたは知らせてくれた。主が私をあなたの手に渡されたのに、私を殺さなかったからだ。(1サムエル 24:18)」

それなのにダビデは今、反対のことを行なおうとしています。なぜでしょうか？相手がサウルではなかった、ということがあります。サウルもナバルと同じように悪をダビデに対して計りました。サウルもナバルと同じようにダビデを見下しました。そしてサウルもナバルと同じように、ダビデの手によって殺されてもおかしくない状況でした。ナバルの中にサウルがいると言っても良いかもしれませんが、けれどもダビデは、サウルという人物については主に油注がれた者という尊敬がありました。ナバルについては気を許していたのです。

私たちはこのように、周囲の環境が変わったり、人が変わったりすると、同じことなのに異なった対応をしてしまいます。ある人々のためには祈れても、全く同じような状況の他の人々のためには祈れません。ある韓国の牧師さんがこんな記事を書いていました。ソウルにおいて何千人ものキリスト者の大会があったそうです。それは北朝鮮の人たちのために助け、祈りを捧げる集会だったそうです。その大会の会場に赤十字の人たちの献血車がとまっていました。この善意ある人々から足りない血液を分け与えてもらえるかもしれないと思ったからです。献血をした人は何と十人にも満たなかったとのこと。遠くの北朝鮮の人たちのためには祈れても、輸血が足りなくて苦しんでいる韓国の人たちのために心を寄せる余裕がなかった、ということでした。

2B 機転を利かせた女 14-22

そこで主は、ナバルの妻アビガイルを用いてダビデに気づきを与えられます。

25:14 そのとき、ナバルの妻アビガイルに、若者のひとりが告げて言った。「ダビデが私たちの主人にあいさつをするために、荒野から使者たちを送ったのに、ご主人は彼らをののしりました。25:15 あの人は私たちにたいへん良くしてくれたのです。私たちは恥ずかしい思いをさせられたこともなく、私たちが彼らと野でいっしょにいて行動を共にしていた間中、何もなくしませんでした。25:16 私たちが彼らといっしょに羊を飼っている間は、昼も夜も、あの人は私たちのために城

壁となってくれました。25:17 今、あなたはどうすればよいか、よくわきまえてください。わざわざが私たちの主人と、その一家に及ぶことは、もう、はっきりしています。ご主人はよこしまな者ですから、だれも話したがるらないのです。」

若者が、ダビデから遣わされた者たちが行ったことは真実であることを確認しました。そして災いが来ることを妻アビガイルに伝えています。若者が、主人のことを「よこしまな者」と言っていますから相当よこしまだったのでしょう。かつてエリの息子にこの言葉が使われました(2:12)。

25:18 そこでアビガイルは急いでパン二百個、ぶどう酒の皮袋二つ、料理した羊五頭、炒り麦五セア、干しぶどう百ふさ、干しいちじく二百個を取って、これをろばに載せ、25:19 自分の若者たちに言った。「私の先を進みなさい。私はあなたがたについて行くから。」ただ、彼女は夫ナバルには何も告げなかった。

ダビデに与える食べ物です。お祝いの料理のみならず、干しぶどうと干しいちじくは保存食としてダビデたちにはとても助かったことでしょう。

25:20 彼女がろばに乗って山陰を下って来ると、ちょうど、ダビデとその部下が彼女のほうに降りて来るのに出会った。25:21 ダビデは、こう言ったばかりであった。「私が荒野で、あの男が持っていた物をみな守ってやったので、その持ち物は何一つなくならなかったが、それは全くむだだった。あの男は善に代えて悪を返した。25:22 もし私が、あしたの朝までに、あれのもののうちから小わっぱひとりでも残しておくなら、神がこのダビデを幾重にも罰せられるように。」

いかがでしょうか？私はダビデの気持ちが分かります。これだけ良いことを行なったのに、それでこのような悪で返されるのであれば、もし私に力があれば、相手を倒したいと思うはずです。自分にその力があるのに、それを控えることは難しいことです。けれどもダビデは、サウルの着物のすそを切り取っただけで力を行使しませんでした。しかし、その時にちょうどアビガイルがこのように来ているのです。主の憐れみです。

3B 王になってからのつまずき 23-35

25:23 アビガイルはダビデを見るやいなや、急いでろばから降り、ダビデの前で顔を伏せて地面にひれ伏した。25:24 彼女はダビデの足元にひれ伏して言った。「ご主人さま。あの罪は私にあるのです。どうか、このはしめが、あなたにじかに申し上げることをお許してください。このはしめのことばを聞いてください。25:25 ご主人さま。どうか、あのよこしまな者、ナバルのことなど気にかけないでください。あの人は、その名のとおりのおりの男ですから。その名はナバルで、そのとおりの愚か者です。このはしめの私は、ご主人さまがお遣わしになった若者たちを見ませんでした。

アビガイルは、非常に短い時間で何とかしてダビデの行動を止めさせなければいけません。さも

ないとナバル家の男すべてが殺されてしまいます。それで彼女は、一貫して自分をはしためとしてダビデに接しています。完全に罪を自分に帰し、かつナバルの愚かさを認めています。注釈書には、夫のことをそのように悪く言っているのは良くないというものがありませんでしたが、私はアビガイルの言葉は当然だと思います。例えば人に危害を加えた男の妻が、本人は自分のやったことを全く反省しておらず、その悪を悪だと思っていないような時に、被害を受けた人に対して謝罪するとしたら、「この男が本当に愚かなことをして、大変申し訳ありません。」と謝らないでしょうか？同じことをしているのだと思います。

25:26 今、ご主人さま。あなたが血を流しに行かれるのをとどめ、ご自分の手を下して復讐なさることをとどめられた主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。どうか、あなたの敵、ご主人さまに対して害を加えようとする者どもが、ナバルのようになりますように。

ここからアビガイルは聡明さが表れています。彼女は先の先のことを見越して話しています。ダビデが血を流しに行くのを留めるだろうということを初めから言っています。なおかつ、ナバルが主ご自身によって滅びることまでも述べているのです！彼女は知恵をつかって、かつ信仰をもってこのように話していますが、実際にその通りになっていきます。彼女は単なる人間的な知恵ではなく、霊的な知恵、すなわち神の約束を信じる信仰とそれによる預言的な言葉も持ち合わせています。

25:27 どうぞ、この女奴隷が、ご主人さまに持ってまいりましたこの贈り物を、ご主人さまにつき従う若者たちにお与えください。

本来与えるべき食料を今、与えました。

25:28 どうか、このはしためのそむきの罪をお赦しください。主は必ずご主人さまのために、長く続く家をお建てになるでしょう。ご主人さまは主の戦いを戦っておられるのですから、一生の間、わざわざいはあなたに起こりません。25:29 たとい、人があなたを追って、あなたのいのちをねらおうとしても、ご主人さまのいのちは、あなたの神、主によって、いのちの袋にしまわれており、主はあなたの敵のいのちを石投げのくぼみに入れて投げつけられるでしょう。

アビガイルは、主からの約束を既に知っていました。ダビデは必ず救われるのであり、彼が自分の手で戦うのではなく主が戦ってくださいます。したがって、自分の手で敵を滅ぼす必要はないのだ、と言っています。

25:30 主が、あなたについて約束されたすべての良いことを、ご主人さまに成し遂げ、あなたをイスラエルの君主に任じられたとき、25:31 むだに血を流したり、ご主人さま自身で復讐されたりしたことが、あなたのつまずきとなり、ご主人さまの心の妨げとなりませんように。主がご主人さまをしあわせにされたなら、このはしためを思い出してください。」

主の約束は必ずその通りになることを彼女は知っていました。彼女が気にしていたのは、その後のことです。罪を犯したことが王としてその務めをしていくことにつまずきになってしまいます。自分が良心にしたがって動こうとしているのに、それと正反対のことを行なってしまったという負い目が出てきてしまう、また他の者が、ダビデが王となった時に、彼の言っている平和と異なることを行なったと責めるかもしれません。その時のことを考えて今の行動を決めてくださいというお願いです。

私たちにも大きな教訓を与えます。今だけ考えたら、確かに感情に任されて事を行ないたいです。けれども、神に大胆に用いられるためには、良心をきよく保っていき、つまずきになりえるものを避けていく必要があります。自分がどこに置かれているかをわきまえなければいけません。自分は個人ではなく、キリストを身にまとっています。ゆえに、キリストにあって生きる時にそこに自分の生活との不一致が会ったら、それが過去のものであっても心の痛みを覚えます。ゆえに、一貫した行動が必要になるのです。

そしてアビガイルは、自分が憐れみを受けることを願っています。ヨナタンも、ダビデに恵みを施してほしいと頼み、サウルも、滅ぼさないと誓ってくれと願ったし、そしてアビガイルは自分自身がやもめになるかもしれないと思ったのでしょう。それで、「このはしためを思い出してください」と言っています。

25:32 ダビデはアビガイルに言った。「きょう、あなたを私に会わせるために送ってくださったイスラエルの神、主がほめたたえられますように。25:33 あなたの判断が、ほめたたえられるように。また、きょう、私が血を流す罪を犯し、私自身の手で復讐しようとしたのをやめさせたあなたに、誉れがあるように。25:34 私をとどめて、あなたに害を加えさせられなかったイスラエルの神、主は生きておられる。もし、あなたが急いで私に会いに来なかったなら、確かに、明け方までにナバルには小わっぱひとりも残らなかったであろう。」25:35 ダビデはアビガイルの手から彼女が持って来た物を受け取り、彼女に言った。「安心して、あなたの家へ上って行きなさい。ご覧なさい。私はあなたの言うことを聞き、あなたの願いを受け入れた。」

ここにダビデの、へりくだった心があります。女の言っていることを、女であるからといってさげすむことなく、かえってその賢明な言葉に感動しています。彼は、語っている相手が誰であっても、その語っていることが正しければ素直に受け入れたのです。ダビデの心は柔らかいです。これが、主からの声であることをすぐに聞き分けることができました。

そして、ダビデが彼女を妻とします。アビガイルのような妻はとても貴重です。妻が夫に従うのは、夫に対して何も言わないことでは決してありません。妻は、自分の主張を押し通すために夫に語るのではなく、夫を助け、夫に従うために意見を言います。そしてそのような妻の言っていることが、主からのものであると謙虚に受け止められる夫でありたいものです。

4B 主の復讐 36-44

25:36 アビガイルがナバルのところに帰って来ると、ちょうどナバルは自分の家で、王の宴会のような宴会を開いていた。ナバルが上きげんで、ひどく酔っていたので、アビガイルは明け方まで、何一つ彼に話さなかった。

酔いしれた愚か者には、今語っても意味がないことは明らかでした。イエス様も「聖なるものを犬に与えてはなりません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。(マタイ 6:6)」と言われました。そして私たちが何も語らないところにも知恵があります。「自分のことばを控える者は知識に富む者。心の冷静な人は英知のある者。(箴言 17:27)」

25:37 朝になって、ナバルの酔いがさめたとき、妻がこれらの出来事を彼に告げると、彼は気を失って石のようになった。25:38 十日ほどたって、主がナバルを打たれたので、彼は死んだ。

「十日」という期間はしばしば試される期間であります。ナバルの行ったことを主は試されて、彼は死ぬに値するとみなされたのでしょう。けれども、驚くべきことです。ダビデは仕返しをしませんでした。けれどもそれで仕返しがなくなったわけではありません。主ご自身が復讐をしてくださったのです。

25:39 ダビデはナバルが死んだことを聞いて言った。「私がナバルの手から受けたそしりに報復し、このしもべが悪を行なうのを引き止めてくださった主が、ほめたたえられますように。主はナバルの悪を、その頭上に返された。」その後、ダビデは人をやって、アビガイルに自分の妻になるよう申し入れた。

ダビデは、アビガイルが「このはしためを思い出してください」と言ったことばに応答しています。それは妻にすることによってでした。ずいぶんと出来たストーリーだなと感じるかもしれませんが、私は二つの点で優れていることをダビデは行っていると思っています。一つは、王として未亡人を自分の妻とするのは優れたことです。やもめは当時の社会の中では非常に貧しい状況に置かれる身でありました。彼女を救ったのです。もう一つは、彼女のような助言者が妻であれば、神が夫であるダビデに何を言われているのかを教えてくれる人になります。このような女性を妻として持っている男性は幸せでしょう。キリストに真正面から従っていくことができます。

25:40 ダビデのしもべたちがカルメルのアビガイルのところに行ったとき、次のように話した。「ダビデはあなたを妻として迎えるために私たちが遣わしました。」25:41 彼女はすぐに、地にひれ伏して礼をし、そして言った。「まあ。このはしためは、ご主人さまのしもべたちの足を洗う女奴隷となりましょう。」25:42 アビガイルは急いで用意をして、ろばに乗り、彼女の五人の侍女をあとに従え、ダビデの使いたちのあとに従って行った。こうして彼女はダビデの妻となった。

ちょうどかつてのリベカのようなですね。リベカも、アブラハムのしもべの誘いによる、イサクとの結婚に応じました。そして翌朝にしもべに従って、侍女たちを連れて出て行きました。同じようにアビガイルも間髪入れずに応答してダビデの妻になるべく出発しています。

25:43 ダビデはイスラエルの出のアヒノアムをめとっていたので、ふたりともダビデの妻となった。

25:44 サウルはダビデの妻であった自分の娘ミカルを、ガリムの出のライシュの子パーティに与えていた。

初めにアヒノアム、そしてアビガイルです。そしてサウルがミカルを他の男に与えたというのは、サウルはダビデが死んだ者とみなしていたというのと同じです。自分の婿という関わりを断ち切ったということです。それでおそらくは、ダビデは自分自身で嫁を娶るようにしたのかもしれませんが。

2A 大きく勝利するダビデ 26

1B 余裕の救い 1-12

26:1 ジフ人がギブアにいるサウルのところに来て言った。「ダビデはエシモンの東にあるハキラの丘に隠れているではありませんか。」

ジフ人は、以前にもサウルにダビデのことを通報しました。覚えていますか、ジフ人がサウルに言ったので、サウルがやってきてダビデとの間には一つの岩しかありませんでした。けれども、ペリシテ人がイスラエルに入ってきたことを聞いたので、その場を離れました。

26:2 そこでサウルはすぐ、三千人のイスラエルの精鋭を率い、ジフの荒野にいるダビデを求めてジフの荒野へ下って行った。

サウルはエン・ゲディの要害にダビデがいた時にも、同じ人数の三千人の精鋭を率いていました。サウルはエン・ゲディの時に声を上げて泣いて、ダビデを追い回したことを非常に悔いていましたが、今は全く同じことを繰り返しているのです。

26:3 サウルは、エシモンの東にあるハキラの丘で、道のかたわらに陣を敷いた。一方、ダビデは荒野にとどまっていた。ダビデはサウルが自分を追って荒野に来たのを見たので、26:4 斥候を送り、サウルが確かに来たことを知った。26:5 ダビデは、サウルが陣を敷いている場所へ出て行き、サウルと、その將軍ネルの子アブネルとが寝ている場所を見つけた。サウルは幕営の中で寝ており、兵士たちは、その回りに宿営していた。26:6 そこで、ダビデは、ヘテ人アヒメレクと、ヨアブの兄弟で、ツェルヤの子アビシャイとに言った。「だれか私といっしょに陣営のサウルのところへ下って行く者はいないか。」するとアビシャイが答えた。「私があなたといっしょに下って行きます。」

前回のエン・ゲディの時よりも、ダビデの言動には落ち着きがあります。また大胆です。サウルの陣営のところまで行き、なんとその宿営のところまでたった二人で行っています。ここには、圧倒的に主がダビデの味方をしてくださっている姿を見ます。同時に、ダビデがこの流れを把握していることもあります。アビガイルがダビデに話したように、自分のいのちは確かに、「主によって、いのちの袋にしまわれて」いるのだということ、また「主はあなたの敵のいのちを石投げのくぼみに入れて投げつけられる(25:29)」ということを実感していたのでしょう。

26:7 ダビデとアビシャイは夜、民のところに行った。見ると、サウルは幕営の中で横になって寝ており、彼の槍が、その枕もとの地面に突き刺してあった。アブネルも兵士たちも、その回りに眠っていた。26:8 アビシャイはダビデに言った。「神はきょう、あなたの敵をあなたの手へ渡されました。どうぞ私に、あの槍で彼を一気に地に刺し殺させてください。二度することはいりません。」26:9 しかしダビデはアビシャイに言った。「殺してはならない。主に油そそがれた方に手を下して、だれが無罪でおられよう。」

この会話も、エン・ゲディの時と同じですね。けれどもダビデは、さらに具体的なことをアビシャイに話します。

26:10 ダビデは言った。「主は生きておられる。主は、必ず彼を打たれる。彼はその生涯の終わりに死ぬか、戦いに下ったときに滅ぼされるかだ。」

サウルが主によって打たれることを、ダビデは確信していました。サウルに対して持っているわだかまりが彼には少なくなったのでしょう。多くの祈りの中で、また多くの主の真実の中で、ダビデはサウルが主の手の中に落ちることを確信していったのです。

26:11 私が、主に油そそがれた方に手を下すなど、主の前に絶対にできないことだ。さあ、今は、あの枕もとにある槍と水差しとを取って行くことにしよう。」26:12 こうしてダビデはサウルの枕もとの槍と水差しとを取り、ふたりは立ち去ったが、だれひとりとしてこれを見た者も、気づいた者も、目をさました者もなかった。主が彼らを深い眠りに陥れられたので、みな眠りこけていたからである。

エン・ゲディの時は着物の切れ端を取りましたが、今回は槍と水差しです。そして、二人が気づかれなかった理由が、「主が彼らを深い眠りに陥れられたので」とあります。圧倒的な主の働きがありました。

2B 悩みの明かし 13-20

26:13 ダビデは向こう側へ渡って行き、遠く離れた山の頂上に立った。彼らの間には、かなりの隔たりがあった。26:14 そしてダビデは、兵士たちとネルの子アブネルに呼びかけて言った。「アブ

ネル。返事をしろ。」アブネルは答えて言った。「王を呼びつけるおまえはだれだ。」26:15 ダビデはアブネルに言った。「おまえは男ではないか。イスラエル中で、おまえに並ぶ者があろうか。おまえはなぜ、自分の主君である王を見張っていなかったのだ。兵士のひとりが、おまえの主君である王を殺しにはいり込んだのに。26:16 おまえのやったことは良くない。主に誓って言うが、おまえたちは死に値する。おまえたちの主君、主に油そそがれた方を見張っていなかったからだ。今、王の枕もとにあった王の槍と水差しが、どこにあるか見てみよ。」

ダビデは、アブネルに呼びかけました。新月祭にはサウル、ヨナタンと共に食事の席についていた親しい仲であります。

26:17 サウルは、それがダビデの声だとわかって言った。「わが子ダビデよ。これはおまえの声ではないか。」ダビデは答えた。「私の声です。王さま。」26:18 そして言った。「なぜ、わが君はこのしもべのあとを追われるのですか。私が何をしたというのですか。私の手に、どんな悪があるというのですか。26:19 王さま。どうか今、このしもべの言うことを聞いてください。もし私にはむかうようにあなたに誘いかけられたのが主であれば、主はあなたのささげ物を受け入れられるでしょう。しかし、それが人によるのであれば、主の前で彼らがのろわれますように。彼らはきょう、私を追い払って、主のゆずりの地にあずからせず、行ってほかの神々に仕えよ、と言っているからです。26:20 どうか今、私が主の前から去って、この血を地面に流すことがありませんように。イスラエルの王が、山で、しゃこを追うように、一匹の蚤をねらって出て来られたからです。」

ダビデは、エン・ゲディの時と同じような訴えをしていますが、もっと内容が深くなっています。先ほども、「主が彼を打たれる」とはっきりアビシャイに話していましたが、「それが人によるのであれば、主の前で彼らがのろわれますように。」とはっきりと言っています。ダビデの気になっていることは、「主に対してどうなのか？」ということです。私たちが行なっているあらゆることは、主に見られているものであって、主が見ておられる中で良心をきよく保っているのかどうか判断基準になっていました。

ゆえにサウルに対しても、「もし私にはむかうようにあなたに誘いかけられたのが主であれば、主はあなたのささげ物を受け入れられるでしょう。」と言っています。サウルが主に捧げ物をするのが受け入れられているのかどうか気になっていたのです。また、自分自身がこのように追われているのは、もしかしたら主によるものなのかもしれないという可能性も残っています。つまり、自分自身もサウルも、主の前に立っている者なのかどうかを尋ねているわけです。ダビデとしては、もし自分が罪を犯しているのであれば、主がサウルを通してでも、また他の者を通してでもそれに対する懲らしめを与えられるのは当然だと思っていました。だからそれは甘んじて受けなければいけないと思っていました。「しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。(1コリント 11:31)」つねに自分を吟味しているわけです。

けれども、ダビデの側に不義がないにも関わらず、一方的に危害を加えようとしているのであれば話は別です。私たちが罪を犯した後に、「それは誰々が行なったからだ。悪魔が行なったのだ。」ということではできません。「だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。(ヤコブ 1:13-14)」

そして理由が大事です。「彼らはきょう、私を追い払って、主のゆずりの地にあずからせず、行ってほかの神々に仕えよ、と言っているからです。」ダビデは主の前にその者が呪われるように、と言っていますが、その理由が、ダビデの最も苦しい訴えでした。彼にとって最も苦しかったのは、「主のゆずりに地にあずかれていないこと」であります。主が与えられたイスラエルの地の中にいることができないようにさせていることであります。これが迫害者の姿です。迫害者が行なうことは、信仰者が神の約束されているところに留まることができないようにさせることです。信じていることに対して攻撃します。信仰生活に必要なもの、すなわち祈りや聖書をその人から除こうとします。教会の礼拝に通わせないようにします。

そしてダビデが悩んでいるのは、「行ってほかの神々に仕えよ」ということです。ダビデがサウルの手から逃れるには、イスラエルの敵のところに行くことであります。それでダビデは、初めにガテの王アキシュの領土に行ったわけです。またモアブの王に両親を任せてから、すぐそばの要害にいたのですが、預言者ガドが来てユダの地に戻りなさいと告げられました。主に仕え、主に従いたいと思っているのに、それをさせないことこそが、神の呪いを招く原因であると訴えているのです。迫害者はこのことをさせます。世にある慣習や規則を、それが神の命令に反することであるのに行なわせようとしています。会社の中では偽りを言うようなことをさせようとしています。家庭の中では異教の儀式に参加させようとして強要します。

3B サウルの愚かさ 21-25

26:21 サウルは言った。「私は罪を犯した。わが子ダビデ。帰って来なさい。私はもう、おまえに害を加えない。きょう、私のいのちがおまえによって助けられたからだ。ほんとうに私は愚かなことをして、たいへんなまちがいを犯した。」

これはサウル自身の生涯そのものを表している一言です。「ほんとうに私は愚かなことをした」という言葉です。主から王として召され、選ばれているのに、その召しに応答することなく、反対のことを行ない続けたことが愚かなことです。これでは初めから選ばれていなかったほうが良かった、ということになります。

今朝読んだ御言葉ですが、私たちが世から救われたのであれば、その選びと召しを確かなものにしていく必要があります。「ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたことを確かなものとしなさい。(2ペテロ 1:10)」その反対のことを行なえば、初めの時

よりも悲惨な状況になります。「主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりももっと悪いものとなります。義の道を知っていながら、自分に伝えられたその聖なる命令にそむくよりは、それを知らなかったほうが、彼らにとってよかったです。(2ペテロ 2:20-21)」サウルの生涯は、このようにキリスト者として召されたにも関わらず、世の汚れの中に征服されていることを表しています。

そしてサウルは、「私は罪を犯した」と言っていますが、空疎な言葉になっています。それはちょうどエジプトのパロがモーセに対して、「私は罪を犯した」と言ったのにすぐに翻ったのと同じです。

26:22 ダビデは答えて言った。「さあ、ここに王の槍があります。これを取りに、若者のひとりをおこしてください。26:23 主は、おのおの、その人の正しさと真実に報いてくださいます。主はきょう、あなたを私の手に渡されましたが、私は、主に油そそがれた方に、この手を下したくはありませんでした。26:24 きょう、私があなたのいのちをたいせつにしたように、主は私のいのちをたいせつにして、すべての苦しみから私を救い出してくださいます。」

ダビデはサウルの手から自分を救い出してくださった主を賛美して、こう詩篇に書きしるしています。「あなたは、恵み深い者には、恵み深く、全き者には、全くあられ、きよい者には、きよく、曲がった者には、ねじ曲げる方。(18:25-26)」同じように主は、山上の垂訓で「あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。(マタイ 5:7)」と言われました。これは行ないによる救いではありません。けれども、主の憐れみと恵み深さに応答する者の報いであります。

26:25 サウルはダビデに言った。「わが子ダビデ。おまえに祝福があるように。おまえは多くのことをするだろうが、それはきっと成功しよう。」こうしてダビデは自分の旅を続け、サウルは自分の家へ帰って行った。

サウルは「帰って来なさい。私はもう、おまえに害を加えない。」と言いましたが、ダビデは彼の言うことを聞きませんでした。それが真実のものではないことは明らかだからです。かつてヤコブがエサウと再会して、エサウがセイルの地にいっしょに行こうと言ったけれども、ヤコブはついて行かずに自分の故郷に戻ったのと同じです。エサウが神に対して悔い改めている訳ではなかったからです。確かに兄弟としての和解はできましたが、神に関する事柄に無頓着なエサウと、神の約束を慕い求めているヤコブが共に過ごせば、確執が起こるのは必至だったからです。

3A 疲れてしまったダビデ 27

そして旅を続けていくダビデであります。サウルに訴えていた「行ってほかの神々に仕えよ」ということを、間接的ながら行ない始めてしまいます。感じていた誘惑をダビデはサウルに話したのですが、その誘惑に陥ってしまいました。

1B 敵の中での居住 1-7

27:1 ダビデは心の中で言った。「私はいつか、いまに、サウルの手によって滅ぼされるだろう。ペリシテ人の地にのがれるよりほかに道はない。そうすれば、サウルは、私をイスラエルの領土内で、くまなく捜すのをあきらめるであろう。こうして私は彼の手からのがれよう。」27:2 そこでダビデは、いっしょにいた六百人の者を連れて、ガテの王マオクの子アキシユのところへ渡って行った。27:3 ダビデとその部下たちは、それぞれ自分の家族とともに、ガテでアキシユのもとに住みついた。ダビデも、そのふたりの妻、イズレエル人アヒノアムと、ナバルの妻であったカルメル人アビガイルといっしょであった。27:4 ダビデがガテへ逃げたことが、サウルに知らされると、サウルは二度とダビデを追おうとはしなかった。27:5 ダビデはアキシユに言った。「もし、私の願いをかなえてくださるなら、地方の町の一つの場所を私に与えて、そこに私を住まわせてください。どうして、このしもべが王の都に、あなたといっしょに住めましょう。」27:6 それでアキシユは、その日、ツィケラグをダビデに与えた。それゆえ、ツィケラグは今日まで、ユダの王に属している。27:7 ダビデがペリシテ人の地に住んだ日数は一年四か月であった。

今朝お話したように、ダビデは疲れていました。それは、ただサウルから追われることに疲れていたということだけではありません。主が事ある毎にダビデを救い出してくださったこと自体にも疲れていたのです。こういうと驚くかもしれませんが、こういうことが起こる事を今朝お話ししました。疲れ、そしてそれに伴う落胆です。主が何度も何度も、ダビデを救い出してくださったのですが、その度に主に呼び求めることを行なわなければいけないことに疲れていたのです。けれども、やはりそれでも唯一の避け所は主ご自身なのです。この方以外に避け所はないのです。その営みやめてしまったのがダビデです。

この間の一年四か月にダビデは、詩篇に詩を書き残していません。サウルから追われた時、また罪を犯して悔い改めた後、また自分の息子アブシャロムに追われた時などの詩は残していますが、アキシユの下で働いている時は何一つないのです。それもそのはず、その時期は自分の心の中に語りかける時だったのです。主に顔を向けず、地面に顔を向けていたような状態でした。表向きは平穏を取り戻しました。家族や妻にも平穏な生活を与えたいと思ったのでしょうか。けれども、主への生きた交わり、その祈りが消えていた時期でした。

ところでダビデが、アキシユの所に初めに行った時は殺されるかもしれない大変な状況でしたが、今はアキシユに暖かく迎え入れられています。おそらく、サウルに追われているということが広く知れ渡っていたからでしょう。だから、ダビデはサウルの敵になったのだとアキシユは判断したのかもしれません。そしてアキシユはツィケラグの町をダビデに与えます。そこはユダの町でしたが、ペリシテ人がその時は奪っていました。

2B 偽りの上塗り 8-12

27:8 ダビデは部下とともに上って行って、ゲシュル人、ゲゼル人、アマレク人を襲った。彼らは昔から、シュルのほうエジプトの国に及ぶ地域に住んでいた。27:9 ダビデは、これらの地方を打つと、男も女も生かしておかず、羊、牛、ろば、らくだ、それに着物などを奪って、いつもアキシュのところに帰って来ていた。27:10 アキシュが、「きょうは、どこを襲ったのか。」と尋ねると、ダビデはいつも、ユダのネゲブとか、エラフメエル人のネゲブとか、ケニ人のネゲブとか答えていた。27:11 ダビデは男も女も生かしておかず、ガテにひとりも連れて来なかった。彼らが、「ダビデはこういうことをした。」と言って、自分たちのことを告げるといけない、と思ったからである。ダビデはペリシテ人の地に住んでいる間、いつも、このようなやり方をしていた。27:12 アキシュはダビデを信用して、こう思った。「ダビデは進んで自分の同胞イスラエル人に忌みきらわれるようなことをしている。彼はいつまでも私のしもべになっよう。」

ダビデには、もちろん良心がありました。同胞のユダの民を殺すことがペリシテ人アキシュの心にかなうことなのですが、彼は異邦の民を殺していました。シナイ半島の北部にいるゲシュル人、ゲゼル人、そしてアマレク人を殺していたのです。そしてユダまたユダの味方をしている民の町々を襲って略奪していたと言ってアキシュに伝えています。同じように、「私はこれこれのことをしていないから大丈夫だ」と自分に言い訳をいって、罪に妥協する道を歩んでいることが私たちにないでしょうか？

このように罪に対して妥協すると、今度はそのことが知られないように偽りの道を選び取るようになります。さらに偽りの道を通ると、それを塗り固めるためにさらに罪を犯します。ダビデはばれることのないように女子供も虐殺したのです。

3B 兄弟の敵 28:1-2

そして 28 章の 1-2 節も読んでみましょう。

28:1 そのころ、ペリシテ人はイスラエルと戦おうとして、軍隊を召集した。アキシュはダビデに言った。「あなたと、あなたの部下は、私といっしょに出陣することになっているのを、よく承知してもらいたい。」28:2 ダビデはアキシュに言った。「よろしゅうございます。このしもべが、どうするか、おわかりになるでしょう。」アキシュはダビデに言った。「よろしい。あなたをいつまでも、私の護衛に任命しておこう。」

ダビデは自分の心では、同胞の民を殺してはならないと思っていました。けれども、その最後の砦である良心さえもが麻痺しつつあったのです。私たちは、罪に妥協していたとしてもこれだけは行っていないから大丈夫だと思いながら、実は真っ向から神の命令に反対していることを行っているのです。罪はそれだけ自分がしていることを分からなくさせます。そして、罪は兄弟をつまずかせることになります。ダビデがイスラエルに敵対するようになったように、個人的なことだと思っても結果は兄弟を欺き、つまずかせることになるのです。

今回は、サウルの最期とまたダビデの立ち上がりを見ます。彼は痛い方法で主からの語りかけを受けました。けれども、その回復はすばやいものでした。神の豊かな恵みを見ることもできます。そしてサウルの最期は本当に残念で悲しいものです。お祈りしましょう。